肝細胞癌におけるダイナミックMRI所見と病理所見の比較

（九州大学病院で2003年から2006年までに肝細胞癌を切除された方の中で、術前にダイナミックMRIおよびCTHA が施行された方を対象）

【はじめに】

古典的肝細胞癌は、造影ダイナミック検査において、早期に増強され、すぐに洗い出されることが知られています。早期濃染の機序および臨床的意義に関する報告は複数見られ、前癌状態から脱分化が進むにつれて腫瘍血管が増加し、早期濃染を示す頻度が上昇することが知られています。CTHAは動脈血流の増加を直接画像化できる検査ではありますが、侵襲度が大きい点が問題です。一方、MRIは非侵襲的であり、CTよりもコントラスト分解能に優れるという利点も知られており、肝細胞癌の早期濃染も良好に描出されることが予想されます。しかし、CTHA所見と造影ダイナミックMRIによる早期濃染描出能の比較は今までされていません。また、洗い出しについても注目されておらず、その機序や臨床的意義に関しては検討されていません。

【研究内容】

肝動脈造影下CT（CTHA）所見をgold standardとして、新しい造影ダイナミックMRI sequenceを用いた肝細胞癌の早期濃染の描出能の評価を行います。さらに、その結果をもとに造影ダイナミックMRIで早期濃染を呈した肝細胞癌の洗い出しパターンを病理所見と比較し、その機序について検討・考察します。

【患者さんの個人情報の管理について】

本研究の実施過程およびその結果の公表（学会や論文等）の際には、患者さんを特定できる情報は一切含まれません。

もし、対象者となることを希望されない方は、下記連絡先までご連絡下さい。

【研究期間】

研究を行う期間は承認日から2010年9月30日まで。

【医学上の貢献】

造影ダイナミックMRIの早期濃染描出能を正確に評価することができます。肝細胞癌の早期濃染の出現は治療の必要性とも関連が示唆されており、CTHAを施行できない症例や施設において、first choiceの検査となりえます。また、洗い出しパターンを評価することで肝細胞癌の病理所見を類推することが出来れば、従来通りの検査の範囲内で、付加情報を獲得できます。治療法や経過観察の間隔の決定に寄与する可能性があります。

【研究機関・組織】

九州大学大学院　臨床放射線科

教授　　本田　浩　（責任者）

助教　　西江昭弘

大学院生　岡本大佑

連絡先：〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1

Tel　092-642-5695

担当者　西江昭弘